

高等学 校

平成 31 年度 (2019 年度)

教育研究員研究報告書

公 民

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	2
IV	研究方法	3
V	研究内容	5
VI	研究の成果	16
VII	今後の課題	16

研究主題	多面的・多角的に考察する力を育成するための 授業改善と学習評価の充実 ～現代の諸課題に対する興味・関心を高める「問い」と 「対話的活動」を組み合わせた授業の工夫～
------	----------------------------------------------------------------------------------------------------

I 研究主題設定の理由

1 学習指導要領の改訂

本研究では、高等学校学習指導要領解説公民編（平成 30 年 7 月）（以下、「解説」と表記。）で指摘された「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」について検討した。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省 平成 28 年 12 月 21 日）（以下、「答申」と表記。）では、子供たちが自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくことができるよう、必要な力を確実に育てていくことが重要とされた。

本研究では、公民科で育成すべき「資質・能力」を「解説」を参考に、以下の 4 点とした。

- ・現代の諸課題を理解し、諸資料から情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能
- ・事実を基に概念を活用して多面的・多角的に考察したり、公正に判断したりする力
- ・合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力
- ・現代の諸課題を主体的に解決する態度や、人間としての在り方生き方の自覚

本研究での主題を設定するに当たり、「答申」で言及されている課題を踏まえ、現状について、以下の 3 点に整理した。

- ①現代の諸課題について、諸資料から情報を読み取り、多面的・多角的に考察する力を育成する必要がある。
- ②現代の諸課題について、公正に判断する力や議論する力を育成する必要がある。
- ③現代の諸課題に対して、主体的に解決しようとする態度を育成する必要がある。

2 これまでの教育研究員における研究

平成 29 年度の公民部会では、「現実社会の諸課題について、課題把握、課題追究、課題解決の学習過程を通して、公正に判断する力と論拠を基に議論する力を育成するための授業改善」という研究主題を設定した。研究成果として、第一に課題把握、課題追究の学習過程で多面的・多角的に考察し、公正に判断する力や課題解決の学習過程で論拠を基に議論する力を育めるかについて、ループリックの検証によりその有効性を実証した。一方で効果的なループリックの使い方・提示の仕方について、研究と学習過程に応じた「思考力、判断力、表現力等」を育むための単元指導計画を作成することが課題として提示された。

平成 30 年度の公民部会では、「現代の諸課題について概念や理論を活用して考察する学習活動と学習評価の充実」という研究主題を設定した。研究成果として、現代の諸課題と生徒とのつながりを「問い」を通して気付かせ、課題解決の見通しをもたせることで、選択・判

断の手掛かりとして活用できる概念や理論を身に付けさせることができるかについて、有効性について実証した。しかし、対話的活動と論述活動のルーブリックによって評価する授業と、一斉型授業の知識の習得することを主とした授業とのバランスについて課題が提示された。

本研究では、生徒一人一人の興味・関心について着目し、一人一人の興味・関心を高めることができれば、多面的・多角的に考察する力や主体的に解決しようとする態度を身に付けることができると考えた。そこで、「多面的・多角的に考察する力を育成するための授業改善と学習評価の充実～現代の諸課題に対する興味・関心を高める『問い』と『対話的活動』を組み合わせた授業の工夫～」という研究主題を設定し、その内容や方法について授業実践に有用な学習指導案と学習評価の工夫について提案することとした。

Ⅱ 研究の視点

I で設定した研究主題に基づく研究の視点は、次の2点である。

1 現代の諸課題に関する「問い」の設定

「解説」では、「公民科における各科目において、それぞれの特質に応じた視点の例や、視点を生かした考察や構想に向かう「問い」の例が整理されてきた。単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」を設定し、「社会的な見方・考え方」を働かせることで、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする学習」の重要性が示された。本研究では、学習内容と社会とのつながりを見いだすことのできる「問い」を授業に取り入れることで、現代の諸課題に対して、主体的に考え、多面的・多角的に考察することができると考えた。

2 多面的・多角的に考察する力や主体的に解決しようとする態度の育成を図る対話的活動の充実

「解説」では、主体的に解決しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて、比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりする力の育成が不十分であると指摘している。そのため、主体的に解決しようとする態度や、多面的・多角的に考察する力を育成するために、概念や理論を活用して相互に考えを深め合う「対話的活動」を充実させることとした。

Ⅲ 研究仮説

仮説1

生徒が、学習内容と社会のつながりを見いだすことのできる「問い」を設定し、共通理解を図るとともに、学習内容について概念や理論を活用して相互に考えを深め合う「対話的活動」を充実させることで、生徒の学習に対する興味・関心を高めることができる。

学習内容を確認するための適切な「問い」を設定することで、生徒は「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」を見通すことができる。見通しをもって、概念や理論を学び、それらを活用した「対話的活動」を実践していけば、生徒の深い学びへとつながり、現代の諸課題に対する興味・関心を高めることができる。そこで本研究では、生徒が学習内容と社会とのつながりを見いだすことのできる「問い」の設定と、概念や理論を活用して相互に考えを深め合う「対話的活動」を組み合わせた授業を提案した。

仮説 2

生徒の興味・関心を高めることで「問い」に対して主体的に解決しようとする態度を育成するとともに、多面的・多角的に考察する力を育成することができる。

生徒一人一人の興味・関心を高めることができれば、生徒の主体的に解決しようとする態度や、多面的・多角的に考察する力を身に付けることができる。さらに、こうした力を身に付けることで、現代の諸課題に対して更に考えを深めようと考え、主体的に行動し、自らの人生を切り拓くことにつながる。

仮説 3

生徒の自己評価と、教員による「問い」に対する生徒の考察の評価を組み合わせることで、学習評価の充実を図ることができる。

「問い」に対するルーブリック評価表を用いて生徒の自己評価と、教員による評価を行い、「何が身に付いたか」、「何ができるようになったか」を、生徒、教員の評価を相互に分析することで、学習評価の充実を図ることができると考えた。

IV 研究方法

1 検証授業について

高等学校 2 校において検証授業を行った。

(1) 実践事例 I 「倫理」(高等学校第 2 学年)

「ただ生きるのではなく、善く生きる」ことについて、古代ギリシア思想の知識や現代の諸課題等を踏まえ考察した。この「問い」の「答え」が時代・環境・立場等により、変化する概念や変化しない概念があることに気付かせた。また、予測不能な時代を生きる自分たちがこの「問い」に対峙した時の思考を記述で表現させた。生徒による自己評価とともに、教員による評価を行った。

(2) 実践事例 II 「現代社会」(高等学校第 1 学年)

「平和主義と安全保障」について、ワークシートを用いた講義で知識を習得した後、日本の現状に対する様々な意見・主張を紹介し、対話的活動と記述を通じて考察を深めさせ、自己評価を行った。さらに生徒の記述に対しては教員による評価を実施し、生徒に返却してフィードバックを行った。

2 具体的方策

- (1) 生徒の実態に即した具体的な「問い」を設定し、学習内容と生徒との関連を意識させるとともに、問題に対する共通理解を図る。
- (2) 「対話的活動」を通して、必要な知識や情報を整理させ、手掛かりとなる概念や理論を確認させた後、改めて「対話的活動」を行うことで、深い理解を促す。
- (3) 生徒の興味・関心に対する自己評価と、授業の前後で生徒に「問い」に対する考察をワークシートに記述させ、変容を分析することで、学習評価の充実を図る。

3 検証方法

- (1) 「問い」と「対話的活動」によって生徒の興味・関心を高めることができたか、アンケー

トを活用して検証する。

- (2) 単元指導計画に即した評価規準のルーブリック評価表（表1）を生徒に明示し、授業の振り返りで生徒の自己評価と教員評価（ルーブリック評価、ワークシートの記述）を比較することで、生徒の学習改善と教員の指導改善が図られたかを分析する。

表1 ルーブリック評価表

	A	B	C	D
「問い」の記述	「問い」を理解し、対話を通じて得た他者の意見や、授業で学んだ知識を活用しながら、自分の考えを記述することができた。	「問い」を理解し、対話を通じて得た他者の意見を参考にしながら、自分の考えを記述することができた。	「問い」を理解し、自分の考えを記述することができた。	「問い」に対して記述することができなかった。

V 研究内容

全体テーマ 『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善

高校部会テーマ

「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について

- 1 現代の諸課題を理解し、諸資料から情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能
- 2 事実を基に概念を活用して多面的・多角的に考察したり、公正に判断したりする力
- 3 合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力
- 4 現代の諸課題を主体的に解決する態度や、人間としての在り方生き方の自覚

高校部会テーマにおける各教科等の【現状】と【課題】と【テーマ設定のための着眼点】

【現状】

- 1 現代の諸課題について、諸資料から情報を読み取り、多面的・多角的に考察する力が十分に身に付いていない。
- 2 現代の諸課題について、公正に判断する力や、議論する力が十分に身に付いていない。
- 3 現代の諸課題に対して、主体的に解決しようとする態度が十分に身に付いていない。

【課題】

- 1 現代の諸課題について、諸資料から情報を読み取り、多面的・多角的に考察する力を育成する必要がある。
- 2 現代の諸課題について、公正に判断したりする力や、議論する力を育成する必要がある。
- 3 現代の諸課題に対して、主体的に解決しようとする態度を育成する必要がある。

【テーマ設定のための着眼点】

「問いの設定」「対話的活動」「主体的」「多面的・多角的な考察」

高等学校公民部会主題

多面的・多角的に考察する力を育成するための授業改善と学習評価の充実

～現代の諸課題に対する興味・関心を高める「問い」と「対話的活動」を組み合わせた授業の工夫～

仮説

- 1 生徒が学習内容と社会のつながりを見いだすことのできる「問い」を設定し、共通理解を図るとともに、学習内容について概念や理論を活用して相互に考えを深め合う「対話的活動」を充実することで、生徒の学習に対する興味・関心を高めることができる。
- 2 生徒の興味・関心を高めることで「問い」に対して主体的に解決しようとする態度を育成するとともに、多面的・多角的に考察する力を育成することができる。
- 3 生徒の自己評価と、教員による「問い」に対する生徒の考察の評価を組み合わせることで、学習評価の充実を図ることができる。

具体的方策

- 1 生徒の実態に即した具体的な「問い」を設定し、学習内容と生徒との関連を意識させるとともに、問題に対する共通理解を図る。
- 2 「対話的活動」を通して、必要な知識や情報を整理させ、手掛かりとなる概念や理論を確認させた後、改めて「対話的活動」を行うことで、深い理解を促す。
- 3 生徒の興味・関心に対する自己評価と、授業の前後で生徒に「問い」に対する考察をワークシートに記述させ、変容を分析することで、学習評価の充実を図る。

検証方法

- 1 「問い」と「対話的活動」によって生徒の興味・関心を高めることができたか、アンケートを活用して検証する。
- 2 単元指導計画に即した評価規準のルーブリック評価表を生徒に明示し、授業の振り返りで生徒の自己評価と教員評価（ルーブリック評価、ワークシートの記述）を比較することで、生徒の学習改善と教員の指導改善が図られたかを分析する。

1 実践事例Ⅰ「倫理」

教科名	公民	科目名	倫理	学年	第2学年
-----	----	-----	----	----	------

(1) 単元名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 人間としての自覚～ギリシア思想～

イ 使用教材 「高校倫理 新訂版」（実教出版）

(2) 単元の目標

ア 自然哲学者やソクラテスなどの基本的な先哲の思想を理解することができる。

イ 主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、解決に向けて友人との「対話」「講義」「記述」などを基に協働して考察する力を身に付けることができる。

ウ 社会の一員として「対話」に参加することで、他者との意見の差異を認識しながら意見の調整や合意形成しようとする。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
ソクラテスの「ただ生きるのではなく善く生きる」ことを学習を通して知識の在り方や判断となる概念や理論を理解している。	解決が必要な主題に対し、学習した知識と概念を活用して、多面的・多角的に考察し、自分自身の考えを相手に伝える対話をしたり論述したりしている。	学習した知識や概念を基に、解決が必要な主題について他者と共により良く生きていこうとする自己形成を養い、予測困難な状況の現代社会を生きる人間としての在り方や生き方について自覚を深めようとする。

(4) 単元の指導と評価の計画（9時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準
		ア	イ	ウ	
【基軸となる問い】「ただ生きるのではなく、善く生きる」ことへの考察					
第1時	【ねらい】西暦などの「時」の表し方、地形、ギリシアの位置などを確認する。				
	【問い】6大陸の名称とギリシアの位置はどこか。 ・時系列の表記を理解する。 ・6大陸の名称の理解とギリシアの位置を理解する。	●			・与えられた課題に取り組んでいる。 ・地図帳から正確な位置を理解している。
第2時	【ねらい】神話的世界観からヘレニズム思想までの古代ギリシア思想の流れを理解する。				
	【問い】神話的世界観と合理的世界観の違いは何か。 ・古代ギリシア思想の流れを理解する。 ・古代ギリシア思想家を資料からグループに分類する。	●			・ギリシア思想の流れを正しく理解している。 ・友人と情報を共有し、思想家をグループに分けている。

第3時	【ねらい】「徳」とソフィストの「相対主義」について理解する。			
	【問い】 自分自身の長所は？ 相対主義から自身の「幸福」について考察する。			
	<ul style="list-style-type: none"> 徳の理解のために、自分自身の長所を文章にまとめる。 自分自身の「幸福」を思考しながら相対主義を理解する。 		●	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身の考えを文章として表現している。 友人と積極的に意見を交わし、自分の考えを深めている。
第4時	【ねらい】 ソクラテスの人生を自分自身に置き換えて考察する。			
	【問い】 有罪判決後のソクラテスの行動について自分自身の考えは？			
	<ul style="list-style-type: none"> 「ソクラテスに優る知者はいない」の意味を自分自身に置き換えて、考えをまとめる。 ソクラテスの「無知の知」を理解し、文章にまとめる。 ソクラテスの裁判を自分自身に置き換えて考察する。 		●	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身の考えを、文章として表現している。 習得した知識などを基に、友人と対話し考察を深めている。 自分の考えを文章として表現している。
第5時	【ねらい】 先哲の思想が現代の諸課題の中にも生きていることに気付く。			
	【問い】 女優アンジェリーナ・ジョリーの事例について自分自身の考えは？			
	<ul style="list-style-type: none"> 生命倫理を理解し、「ただ生きるのではなく、善く生きること」との関連性を深める。 有名人の事例を学び、自分自身の「ただ生きること、善く生きること」を考察する。 		●	<ul style="list-style-type: none"> 現代社会の諸問題から「ただ生きるのではなく善く生きる」考えを深めようとしている。 事例を通して、自身の生き方について、文章で表現している。
第6時	【ねらい】 プラトンの基本的な思想を理解する。			
	【問い】 二元論的世界観とは？			
	<ul style="list-style-type: none"> プラトンのテーマを理解する。 二元論的世界観の考えを理解する。 	●		<ul style="list-style-type: none"> プラトンのテーマを正しく理解している。 二元論的世界観を正しく理解している。
第7時 (本時)	【ねらい】 プラトンの二元論的世界観の理論を感覚で確認する。			
	【問い】 自分が描いた「おにぎり」と見本の「おにぎり」は本当に同じか？			
	<ul style="list-style-type: none"> 前回の学習したことを活用し「問い」に対し他人の考えを聞き、自分の考えを文章にまとめる。 友人と意見を交わし考察を深める。 プラトンの思想が、現代社会の中に生きている思想であることを関連付ける。 		●	<ul style="list-style-type: none"> 前回学んだ知識を活用して思考している。 自分自身の考えを文章として表現している。 クラスメイトと積極的に意見を交わしている。
第8時	【ねらい】 アリストテレスの現実主義について理解する。			
	【問い】 アリストテレスは、プラトンの「理想主義」をなぜ批判したか？			
	<ul style="list-style-type: none"> アリストテレスの「現実主義」を理解する。 ヘレニズム思想の流れを理解する。 古代ギリシア思想の流れを理解する。 	●		<ul style="list-style-type: none"> アリストテレスの「現実主義」とプラトンの「理想主義」の違いを理解している。 古代ギリシア思想が現代社会の考え方の源流であることを理解している。

第9時	【ねらい】 古代ギリシャ思想を復習し自分の考えを記述する。			
	【問い】 単元を通して、自分自身の「善く生きる」生き方とは？			
	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘレニズム思想の特色を理解する。 ・単元のまとめ「ただ生きるのではなく、善く生きる」ことへの振り返りをする。 		●	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘレニズム思想と現代の思想との共通点を理解している。 ・「ただ生きることではなく、善く生きること」への自分の考えをまとめている。

(5) 本時（全9時間中の7時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 古代ギリシア思想が我々の日常生活の中に影響を与えていることを理解することができる。
- (イ) 習得した知識を活用し、考察を深めることができる。
- (ウ) 学習内容に対して興味・関心を持ち、友人との対話を通じて考察を深め自分の意見をまとめようとするすることができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) おにぎりを題材として、その本質を問うことで、プラトンの二元論的世界観の理論に興味をもつことができたか検証する。
- (イ) プラトンの二元論について「対話的活動」を通じて、自らの考えを他者に説明し、また他者の意見を聞くことで多面的・多角的な思考ができたか検証する。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○1分間スピーチ発表 ○前回授業の復習 ○本時のねらいの確認 ・描いた「おにぎり」を通して、プラトンの世界説を理解できたか。 ・理想の生き方について思索できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1分間スピーチで生徒を集中させる。 ・前回の授業の復習をし、課題意識をもたせる。 ・消極的な生徒には、積極的に声掛けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいを理解し授業の見直しをもととしてしている。
25分	<ul style="list-style-type: none"> ○各自のプリントに「おにぎり」を描く。 ○「問い」について思考する。 【問い】 本当に「おにぎり」か？ 二つの「おにぎり」はなぜ同じか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自のプリントに「おにぎり」を描くよう指導する。 ・班を6班つくるように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発問やテーマに対して、思索、発言し、意見をまとめている。
	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを他者に分かるように伝える。 ○各班の考えた意見をまとめる。 ○各班で教員の問いに対し、論理的・客観的に説明する内容をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導しながら各班が話し合いやすいように助言・指導する。 ・各班に意見の内容を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者に自分の考えを分かりやすく伝えている。

15分	○まとめ ・プラトンの二元論的世界観を説明する。 ・理想に生きる大切さを理解する。	・本時の授業を振り返りをさせる。 ・次時の学習への見通しをもたせる。	・まとめの講義やプリントに取り組みながら授業を振り返りをしている。
-----	-------------------------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------

(6) 本時の振り返り

ア アンケートの分析

授業を通じて、生徒の興味・関心を高めることができたか確認するため、アンケートを分析した。結果は表2、表3に示した。

学習内容や社会全体に対する興味・関心の高まりについて、「高まった」よりも「変わらなかった」と回答した生徒が多かった。これについては、授業の題材や教材の提示の仕方を工夫する必要がある。授業で最も興味・関心が刺激された活動では「対話的活動」と回答した生徒が最も多く、生徒の感想では、「対話的活動をすることで自分の考えと違った考えがあることを知った」等があり、「対話的活動」が授業の興味・関心を高めることが確認できた。

表2

	高まった	変わらなかった	低下した
授業を受けて、学習内容に対する興味・関心が高まったか。	46%	54%	0%
授業を受けて、学習内容に限定せず、社会全体に対する興味・関心が高まったか。	39%	61%	0%

表3

	「問い」の記述	対話的活動	講義
授業の中で、最も興味・関心が刺激された活動はどれか。	19%	55%	26%

イ ルーブリック評価表の分析

分析対象は160名で表4に評価分布を示した。教員評価と自己評価が一致した生徒の割合は49%とほぼ半数であった。一方、教員評価よりも高い自己評価を付けた生徒の割合は32%であった。逆に教員評価よりも低い自己評価を付けた生徒の割合は19%であった。

表4

		生徒の自己評価			
		A	B	C	D
教員評価	A	9%	8%	0%	0%
	B	15%	25%	11%	0%
	C	5%	11%	13%	0%
	D	0%	0%	1%	2%

ウ ワークシートの分析

「対話的活動」や講義を通じて、多面的・多角的に考察する力を育成することができるか、単元の導入時と単元のまとめ時のワークシートの記述から生徒の変容を分析した。

生徒A

授業前

ソクラテスは「真の自分は魂である」と主張し、人間は魂を善くすることで生きることができると私は考えた。友人は「善く生きることって、自由に生きることじゃない？」と言っていた。もし、友人が自由に生きた場合困る人がでてくる可能性があり、その場合自分は善く生きているとは言えない。自分が善く生きていると思っても他人は思っていない可能性があるからだ。つまり、「善く生きる」定義は自分で決めてよいということになると考えた。

授業後

この授業を通じて、私は「善く生きることとは何か」を考えることが「善く生きる」ということになるのではないかと思った。理由は「善く生きる」ということが一概には決められないからだ。そして、「善く生きる」を追求することが本当の「善く生きる」ということではないか。「善く生きること」が定義できないのならば、追求することで「善く生きる」ことにつながるのではないかと感じた。

この生徒は、「問い」を理解し、講義で得られた知識や「対話的活動」で学んだ他の生徒の意見を活用しながら、「問い」に対する考察を深め、自らの考えを記述できている。

エ 仮説の検証

- (ア) おにぎりの本質の「問い」に対して考察する姿勢や話し合いをする姿勢が観察された。
- (イ) アンケートの結果から、「対話的活動」によって、生徒の学習に対する興味・関心を高めることができたと考える。また、ワークシートの記述から、プラトンの二元論を基に多面的・多角的に考察する力を育成することができたと考える。

オ 成果と課題

(ア) 成果

本授業において身近な「問い」を提示をすることで、生徒の「対話的活動」が活発になり多面的・多角的に考察し記述することができた。単元のまとめで振り返りの記述をすることによって、授業で学んだ概念や理論を活用して考察した記述が多くなり、より客観的な評価や生徒の思考力、判断力、表現力等といった資質・能力を引き出すことができた。

(イ) 課題

授業の中で、最も興味・関心を刺激された活動は「対話的活動」であったが、「対話的活動」の実践がすぐに学習内容や社会全体への興味・関心への高まりにつながるわけではないことも確認できた。今回、身近な「問い」を提示し、授業を展開したが、学習内容や社会全体への興味・関心の高まりが50%前後であることを考えると、十分ではなく、より一層生徒の実態を把握した「問い」の設定や教材の選択が必要と考える。そのことにより、学習の評価と活動の改善が可能になると考える。

2 実践事例Ⅱ「現代社会」

教科名	公民	科目名	現代社会	学年	第2学年
-----	----	-----	------	----	------

(1) 単元名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 平和主義と安全保障

イ 使用教材 「高等学校 改訂版 現代社会」（第一学習社）

(2) 単元の目標

ア 平和主義と安全保障について、我が国の安全が世界の平和の維持と不可分に関連していることについて理解し、その知識を身に付けることができる。

イ 平和主義と安全保障について、幸福、正義、公正などを用いて多面的・多角的に考察できる。

ウ 平和主義と安全保障について、考察し意欲的に追究しようとすることができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 諸資料から必要な情報を収集し、これを適切に読み取り判断している。	① 解決が必要な主題に対して、知識や情報を基に考察している。	① 議論に参加し、よりよい合意形成のために貢献しようとしている。
② 日本の安全保障や防衛、国際社会における役割について、理解している。	② 他のクラスメートの考えを聞き、この妥当性を吟味しながら、自分自身の考えを表現している。	② 学習内容を生かし、より深い理解を得ようとしている。

(4) 単元の指導と評価の計画（2時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準
		ア	イ	ウ	
【基軸となる問い】日本はいかにして平和を為すべきだと考えるか。					
第1時 (本時)	【ねらい】現在の日本の安全保障についてグループで論じ、自身の知識不足に気付く。				
	【問い】日本の平和を維持する上で、これまで重要な役割を果たしてきたものは何か。 ・日本の安全保障に対する各人物の意見を読み、自分自身の考えを文章にまとめる。 ・他のクラスメートと意見を交わし、考察を深める。 ・各人物の意見の中にある、誤りを探し出し、正しい知識を身に付ける。	●	●		・自分自身の考えを、文章として表現している。 ・クラスメートと積極的に意見を交わしている。

第 2 時	【ねらい】 講義で得た知識を活用し、グループでの討論を通じて、考察を深める。			
	【問い】 日本の平和を維持する上で、これから重要な役割が期待されるものは何か。			
	<ul style="list-style-type: none"> ・各人物の意見の中にある、誤りを探し出し、正しい知識を身に付ける。 ・習得した知識を活用し、改めてクラスメートと討論、考察を深める。 ・日本の安全保障に対する、自分自身の考えを文章にまとめる。 	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した知識や、収集した情報を基に、クラスメートと討論し、考察を深めている。 ・知識、情報、討論を活かして、最終的な自分の考えを文章として表現している。

(5) 本時（全2時間中の1時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 考察を深める活動の中で知識の不足に気づき、授業を通じて知識を習得することができる。
- (イ) 学習内容に対する興味・関心をもち、自分自身の考えをもつとともに、他のクラスメートとの討論を通じて、考察を深めることができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) 憲法改正や国民投票について触れることで、社会とのつながりを見いだすことのできる「問い」を設定することで興味・関心を高めることができるか検証する。
- (イ) 新聞記事の資料から情報を読み取り、「対話的活動」を行うことで多面的・多角的に考察する力を育成できたか検証する。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・憲法改正に関する新聞記事を読み、関心が高まっていること、進行の程度によっては、国民投票に自らが関わる可能性があることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークや講義に十分な時間を残すため、テンポよく授業を進める。 	
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・「いかにして平和を為すか」というテーマを確認する。 ・ワークシートの各人物の意見を読み、それを参考にしつつ、自分はどう考えるか、文章にまとめる。 ・任意のグループに分かれ、意見を交わす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国民投票という可能性を示すことで、学習内容と生活との関連性を示し、動機付けを行う。 ・文章を書かせる際は、教科書や資料集を見ないように指示し、知識がないとうまく文が書けないことに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決が必要な主題に対して、知識や情報を基に考察を深めている。

	<ul style="list-style-type: none"> 各人物の意見の中にある誤りを、グループのメンバーとともに探す。 	<ul style="list-style-type: none"> 活発な意見交換のため、人間関係がある程度構築されているメンバー同士でグループを組ませる。 誤りを見付けさせることで、知識の不足に気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 他のクラスメートの考えを聞き、妥当性を吟味しながら、自分自身の考えを表現している。
20分	<ul style="list-style-type: none"> 誤っている個所に下線を引き、訂正していく。 9条に対する政府解釈を確認する。9条は国連による安全保障に支えられた戦後秩序構想に基づくものであったことを理解し、加えて朝鮮戦争や冷戦が起きるとともに状況が変化していったことを理解する。 冷戦後、当初期待された国連による戦後秩序構想は崩壊、GHQからの非武装方針転換の指示を受け、警察予備隊創設、これが後に自衛隊へと組織されていったことを理解する。 資料集を基に判例を確認、自衛隊や日米安全保障条約に対する司法の立場、統治行為論について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 講義による知識の伝達は、今回と次回の二回に分けることを伝え、今回は主に自国に関わる内容を、次回は国際社会に関わる内容を扱うことを明示する。 講義では資料集やプレゼンテーションソフトを積極的に活用し、情報を読み取らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 諸資料から必要な情報を収集し、これを適切に読み取り判断している。 日本の安全保障や防衛、国際社会における役割について、理解を深めている。
5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の内容を整理し、次回の内容について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 次回も意見交換や、文章によるまとめを行うことを予告し、内容について復習するだけでなく、情報収集することを伝える。 	

(6) 本時の振り返り

ア アンケートの分析

授業を通じて、生徒の興味・関心を高めることができたか確認するため、アンケートを分析した。

表5

	高まった	変わらなかった	低下した
授業を受けて、学習内容に対する興味・関心が高まったか。	94%	6%	0%
授業を受けて、学習内容に限定せず、社会全体に対する興味・関心が高まったか。	92%	8%	0%

表6

	「問い」 の記述	対話的活動	講義
授業の中で、最も興味・関心が刺激された活動はどれか。	11%	36%	53%

表5の結果から、検証授業を通して学習内容や社会全体に対する興味・関心を高めることができたことがわかる。また、表6の結果からは、最も興味・関心を刺激した活動は講義であったことが分かる。生徒が書いた授業に対する振り返りからは、「問い」の記述や「対話的活動」を通じて自らの無知に気づき、講義で得られる知識や情報によって、より学習内容や社会全体に対する興味・関心が高まった、という記述が多く見られた。このことから、単に「問い」の記述や「対話的活動」で興味・関心が高まるのではなく、講義によって知識や情報を習得し、それを「問い」の記述や「対話的活動」で活用することによって、有機的に結び付き、授業内容や社会全体に対する興味・関心が高まるのではないかと考えられる。「問い」の内容や「対話的活動」のタイミングについては、生徒の既習事項や、学習の定着度を把握した上で、適切に設定する必要がある。

イ ルーブリック評価の分析

評価の分布は表7に示した。教員評価と自己評価が一致した生徒の割合は49%であった。一方、教員評価よりも高い自己評価を付けた生徒の割合は34%であり、逆に教員評価よりも低い自己評価を付けた生徒の割合は17%であった。

表7

	生徒の自己評価				
		A	B	C	D
教員 評価	A	11%	11%	0%	0%
	B	22%	38%	6%	0%
	C	6%	3%	0%	0%
	D	0%	0%	3%	0%

ウ ワークシートの分析

「対話的活動」や講義を通じて、多面的・多角的に考察する力を育成することができるか、単元の導入時と、単元のまとめ時のワークシートの記述から生徒の変容を分析した。

生徒A

授業前

日本の平和について、今後も他国との同盟が最も重要な役割を果たすと思うし、それは多くの国民が感じていることだと思う。

授業後

イラク戦争時における日本の判断を考えると、他国との同盟を第一に考えるのはリスクがあると思う。また、基地の負担も無視できない問題であり、日本は今後、主体的な判断ができるだけの根拠を身に付ける必要がある。その根拠は、できれば軍事力以外のものであるのが望ましい。

この生徒は、沖縄に実家のある友人と「対話的活動」を行ったが、講義の内容に加え対話から得られた他者の意見を生かし、考察している様子を見て取ることができる。

エ 仮説の検証

- (ア) 平和主義と安全保障に関する「問い」に対して、考察する姿や他者と積極的に意見交換をする姿勢が観察された。
- (イ) 表5の結果から、「問い」の設定、「講義」、「対話的活動」によって生徒の興味・関心を高めることができた。また、生徒のワークシートの記述からは、「対話的活動」によって他者の意見を参考に、多面的・多角的に考察する力を育むことができたことがわかる。
- (ウ) ルーブリック評価表を活用して教員評価と生徒の自己評価を組み合わせることで、生徒は以前より内省的になり、学びに対してより真摯な態度を身に付けることができたと考える。

オ 成果と課題

(ア) 成果

「問い」を設定し、それに対して講義・「対話的活動」・「問い」の記述を組み合わせることで、生徒に多面的・多角的に考察する力を養い、興味・関心を刺激することができた。また、一つの単元の中で様々な活動を行うことで、一部の活動を苦手とする生徒に対しても活躍の場を用意することができ、各活動をそれぞれ評価することで学習評価の充実にもつなげることができた。

(イ) 課題

評価の基準を生徒に示すことは、目標を明確化する上で効果的であり、生徒の学習に対する意識を高めることができたが、教員と生徒との間でルーブリック評価表をより正確に共有するためには、長期的な実施が必要になるものと考えられる。

生徒の「問い」の記述に対する教員側の評価は、「対話的活動」の成果を評価の基準に含んでいたが、記述からだけでは評価が難しい部分があった。これを基準に加えるのであれば、「対話的活動」による影響や変化について、より詳細に書くようワークシートを工夫したり指導したりする必要がある。

VI 研究の成果

1 現代の諸課題に対する興味・関心を高める「問い」と「対話的活動」

実践事例Ⅰ、Ⅱから、「問い」の記述、「対話的活動」、講義を組み合わせた授業構成は、生徒の興味・関心を高める上で効果的であることが実証された。「授業の中で、最も興味・関心が刺激された活動はどれか。」という質問において、実践事例Ⅰ、Ⅱで異なる結果が出たことについては、生徒の実態が異なるため、授業の中の興味・関心が高まる活動に違いがでたと考えた。

生徒の「問い」に対する記述の変容では、単元の導入時の記述よりも、単元のまとめ時の記述の方が、より多面的・多角的な記述が多く見受けられた。その要因となるのは、講義や「対話的活動」から得た知識を活用できたことである。

以上のことから、単元の導入時とまとめ時で、同じ「問い」について記述することで、変容を比較することができ、深い学びにつながったかどうか評価することができた。

2 学習評価の充実と授業改善

ルーブリック評価表による生徒の自己評価と、教員評価を比較した。事前に評価の基準を生徒に示すことで、目標が明確になり、生徒の学習に対する意識を高めることができた。目標とともに、現在の到達段階や改善点が明確になることで、生徒の学習改善につなげることができた。さらに、教員評価と生徒の自己評価を分析し、授業を振り返ることで授業の改善を図ることができた。

さらに、ルーブリック評価表を共有することにより、何をどのように評価するのかを明確にし、評価の公平性を確保することができた。

VII 今後の課題

アンケートの結果からは、「問い」の記述による生徒の興味・関心の高まりは不十分であった。生徒が学習内容と社会とのつながりを見いだすことができるように、既習事項や実態に即した具体的で身近な「問い」の設定が必要である。「対話的活動」については、興味・関心を高める上で一定の効果があることがわかった。より効果的にするためには、習得した知識を活用できるタイミング、内容で「対話的活動」を行う必要がある。

ルーブリック評価表による生徒の自己評価では、適切に自己評価をできない生徒が見受けられた。そのような生徒に対しては、改めてルーブリック評価表を提示した上で、自分の「問い」に対する記述がどの段階にあるのかを認識させる迅速なフィードバックが必要である。迅速にフィードバックを行うことで、生徒は自らの課題とフィードバック内容を結び付けやすくなり、より高い学習効果が得られる。

また、ルーブリック評価表を活用する際は、年間を通した長期的な計画を立て、定期的に行うことが必要である。例えば、単元のまとめや学期ごとなど定期的にルーブリック評価表を活用した評価を行うことで、生徒の学習改善や教員の授業改善に効果的である。複数回実施することで生徒の自己評価と教員評価の差異を認識し、より正確にルーブリック評価表の共有が図られ、生徒の学習改善と教員の授業改善につながり、評価とフィードバックを重ねていく中で、教員評価と生徒による自己評価が一致する割合が増加することが予想される。今後は、効果的な評価のタイミングや回数、迅速なフィードバックの仕方について研究を深める必要がある。

平成 31 年度 (2019 年度) 教育研究員名簿

高等学校・公民

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立六本木高等学校	教 諭	松 島 美 邦
東京都立足立新田高等学校	主幹教諭	加 藤 隆 弘
東京都立八潮高等学校	教 諭	◎伊 藤 聡 史
東京都立国分寺高等学校	教 諭	島 倉 望

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 島田 哲男

平成 31 年度 (2019 年度)
教育研究員研究報告書
高等学校・公民

令和 2 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849